

仲間とともに、まちににぎわいを取り戻したい

島田夏まつりの名物「しまだお化け屋敷」。川端さんは、まちのにぎわいを取り戻そうと、仲間や子どもたちと一緒に、かつて繁盛したお化け屋敷の復活に取り組み、この夏で4回目を迎えました。

【若手を変えるまちづくり】

塗装業を営む傍ら、かつて青年会議所の理事長を務めていた川端さん。15年以上前に一度、夏まつりの名物だったお化け屋敷が姿を消してから、まちに活気がなくなる危機感を抱いたといいます。

「人手不足でお化け屋敷ができなくなって、商店街の若者が減っていることを痛感しました。なんとか復活できないかと、青年会議所で始めたのが4年前です。最初は青年会議所が主催していましたが、さらに規模の大きい楽しいものにしようと、今年から有志を集めた実行委員会形式にして、会場も2つ用意しました」



今回は、初めて有料化したものの、2日間で約2000人が来場し、最も混雑した時間帯では1時間待ちの行列ができたほど。子どもたちからは「こわいけど楽しい」と大好評だったそうです。

初倉中では、放課後にワークショップを行い、どんなお化け屋敷がいいかをみんなで考えました。「こんなお化け屋敷にしたい!」と次々にアイデアが出てきて、それを大人が製作して実現しました。中



しまだお化け屋敷実行委員会 会長
かわばたしょうたろう
川端祥太郎さん(本通一丁目)

【生徒の主体性を伸ばす】
お化け屋敷の復活には、実行委員会だけでなく、中学生ボランティアが50人以上参加。企画と準備、そして当日の演出を行いました。
「特に協力者が多かった

には、島田の名スポットをもじったものもあり、地元ならではの仕掛けができましたよ。当日、会場で子どもたちを驚かせていたのも彼らです。その行動力には、舌を巻きましたね」

【まちを元気にする経験】

子どもたちが怖がったり楽しんだりする姿を見て、川端さんは目を細めます。

「特に、車椅子に乗った子が『遊園地のお化け屋敷には入れないから』と毎年遊びに来てくれることが、すごくうれしい。遊園地のようにほしくないけれど、手作りだからこそできる工夫があります。青年会議所の若手は、それぞれが業界のプロ。みんな自分の得意なことを生かして、活動しています」

また、大人も子どもも楽しんでいることが何よりうれしいと、川端さんは話します。

「ボランティアの中学生に、お客さんが喜んでくれることの楽しさや、まちづくりの楽しさを知ってもらう良い機会。『まちづくりって楽しい!』と生徒たちに経験してもらうことが、将来新たなにぎわいが生まれることにつながれば、うれしいですね」
子どもたちの笑い声が聞こえる元気なまちづくりのために、川端さんは仲間とともに、新たなにぎわいの芽を育てていきます。



お化け屋敷入り口(中は、入ってからの楽しみ)

Shimadajin File #94

島田
Story 人